

「マルタとマリア」

2015年07月31日

ルカによる福音書 10章 38節～42節。一行が歩いて行くうち、イエスはある村にお入りになった。すると、マルタという女が、イエスを家に迎え入れた。彼女にはマリアという姉妹がいた。マリアは主の足もとに座って、その話に聞き入っていた。マルタは、いろいろのもてなしのためせわしく立ち働いていたが、そばに近寄って言った。「主よ、わたしの姉妹はわたしだけにもてなしをさせていますが、何ともお思いになりませんか。手伝ってくれるようにおっしゃってください。」主はお答えになった。「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。しかし、必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない。」

エルサレムから2～3km離れた所にベタニヤ村があった。ここに、マルタ、マリア、ラザロの3姉弟の家族が住んでいた。両親は亡くなっていたらしい。主イエスは、この家族を愛し、しばしば訪ねていた。主イエスが久しぶりに来られたので、家族は大喜びだった。長女のマルタはもてなしをしようと懸命に働いていた。両親のいない家族だから、マルタはてきぱきと家事をする役目が身につけていたであろう。一方、妹のマリアは主イエスの足もとに座り、話に聞き入っていた。マルタは主イエスの話に聞き入るマリアに腹が立ってきた。焼きもちもあつただろう。そこで、主イエスの傍まで来て「主よ、わたしの姉妹はわたしだけにもてなしをさせていますが、何ともお思いになりませんか。手伝ってくれるようにおっしゃってください」と不満を打ち明けた。この言葉はお客様に言う言葉ではないだろう。マリアに「あなた、私を手伝ってよ」と言うべきである。それを、甘えるように主イエスに言った。この家族と主イエスはこのような親しい関係にあったことを示している。マルタの不満に対し、主イエスは「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。しかし、必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない」と応じている。この主イエスの言葉に対し、異議が出されている。もてなしをするためには、家事労働が必要で、それをしているマルタが否定され、何もしないマリアが賞賛されることに納得できないという意見である。教会には台所に立って細やかに奉仕する女性たちが多く、彼女たちは自分たちが否定されたように受け止めるからである。

主イエスはもてなしを受けるより、話を聞いてくれることを求めたのであろうか。当時は、宗教議論は男性中心で、女性は遠くからしか参加できなかったから、それを破り、足もとに座って聞き入ることを許した主イエスのフェミニズムを評価する人々もいる。

堀江謙一氏は太平洋を小さなボートに乗って、一人ぼっちでアメリカに渡った。風と潮に任せ、アメリカのサンフランシスコを目指した。この航海において、大切なことは、今、自分はどこにいるかを確認することである。それが分からないと、カナダか南米に着いてしまう。堀江氏は、海の上で位置を確認するため、「時々」、星や太陽や月から自分の位置を計る。位置を確かめてから、進むべき方向を定めるのである。

私たちは四六時中、神や主イエスについて考え、祈っている訳ではない。そんなことはできないし、する必要もない。日常生活ではマルタのように、なすべきことをひたすら励むのである。しかし「時々」、立ち止まって、私はどこにいるのか、何をしているのかを見極めることが大切である。立ち止まって、見極めることが主イエスに聞くことである。マリアが、今は聞く時として選び取ったことを主イエスは喜ばれたのではないか。